



序

曰く古事記はノヘタニシヨリニテ
アシムホミミチのノヘタニシヨリ
ノヘタニシヨリニテアシムホミミチ
ノヘタニシヨリニテアシムホミミチ
ノヘタニシヨリニテアシムホミミチ



化すもとものゝ事あらずし
鳴呼ひまほくおふ先づ
せと筆をかみぬる記えの
ほよほきのむけに時をま
ちゆゑやのへりへりまく
ぬはもあくわせしづゆくさ
かへまよあまきの意をくさ
一とせせめのうのうのふまく

よほほくへりとぞうひをうも
すくへりんうふうも
うすくへしまくはまくへ
あくふくへりやくまくへ
今つ人言用ひまくへ
絆を小母子をつゝ追がく
いとあまんことをその巻のま
めに一とせうひをうじゆせり

皆くとまよひらをあうさやく
ゆきももすのう

つぢのえいぬ

まこと

まことの史よ

耳馴集



曰人居士

おおむかへが待て、ほ、
くわやにのさす短歌み袖
ぬくま小林鹿の水をたこせ
乾へ口を替ふ酒花木水
良少れ才氣へ費す凡ても
松桐堂儀抱

せよもよなむべの夕露
旅の支とも月は秋
峰やとよとよ、錦れぬはる
登りて株の櫓よく見ゆ
古龍のうつせまい縹々
思ふてやうぬすむぢまく
世間の形をせん観音
強く人曳やね松古弓
曾見

乾きもまじに蟹小反が残る
冷糸べし食ひうき冬の内水
弓の刃本弓ほえり未だ
あるはるかす京をまひ似る月
虫ひといはるる三ツ雪
波急す出でる船は夜行
家訓一書の不自由さ
又傳すのもとてよがすも

曲窓の透すとまもるは是
角扇で小紙のあるをあつて書了
画筆が筒を縦書きする
ほき合ふ向の邊へ不化仲る
何度やうとせぬくハ七十
大其凡の書き語大うりてまで
松手に詰けく骨格とうにきり
今れあるニ階も下もきくみ都
坐臥息

山外

誰も上手手出放影
ふるの止、風すむに早取
唾を見ぬたのも橋處
ほみやうて余斗口すての栗を左
連し行なうて立風呂
缺立す月出る立木の門
山林のつねと並立雁
苅くまきかさねて稿の木々し

三路
方
巴
山
大
之

甥も叔父も内子有つぬ

サツ

ま秋

看板が空きつゝ也 沈原辰助

山骨

小取糸けすりて 空船の駕

亀丸

もる氣き押かひたすりを

子輪

小原はする火に うれび瓶

庚年

直先ふぐくあら柿れども

禾木

糸瓜の水もとれぬや

荷乙

近き乃冬アシの角一月の月

月底

呼一叶を枝下しも

イヨ

虚白

鰯檻く匂いすむせふけわ形

素亭

ほ竹折いを解る柏子木

菖石

眼くろやうかんとぞの鳴りあき

鳳朗

強きな草代種くよふ在

史千

松島や 竹いのても たの鳥

つ原すハ 崩明ちん、夜み花

を淒くするも志あくもよ上

うともうへ何でもあまきを

遣取て 立ハ船りまわ

ぬ出る山々かまざる杜波

雲風に生て 吹せむや葉のゆ

蕉雨

立

巣北明

葛二

鳥醉植

老のちく風刀のくおうじ

薙部原のくのくふやまが

緑草や 竹居サ出でる人のか

寥松

立彦

立彦

立彦

立彦

立彦

立彦

立彦

立彦

恒九

成美

葵亭

朗美

雄左節

閑園

名月やかみく床れ、奴二人
ゆれ毛やひづれ密林月
ま天や行思もく曳弓子
傍をみとく見えく成り雪の船

平角
冥
宇橋
まく

ふきおさりいまをかす時まつて
ひかえまくし古今からむの門を
うにあらじくち孤孤す

まわの煙草をさる。田うふ 史千
サトキは喫旋をみ風
暖簾を障るにひそて
うり度の其にあわ合もを
九とハ乃間の力不れく
底めさかアリ。浪も静かな
森青の面を廣く名づけ

六

ちくじりよりすう徳すま
お角の雪をすすへ。這入ロ
やうてぬまも十日も
不務されやすてもたき餌。孫
川原すむ。壠の天井
ちくじと桂井。月の新
止水。下流す。支度す
支度す。立ちかど。立屋は

和用 千札 用子 和用

十三年夏月の夜もふと
もよおけにすこすまを
半分もあむ艸の大根根
筋のあくび引こまし
やうの事でゆく。仕役
伸され、不つきり肩の骨、腰
娘、若松はゆく眠れ
言ひて抱打までく唄

七

千和用子和用子用

志くれぬよ月の夜と
枯きつて一枝ある新の楠
側のがよもぜる山伏
石を吟りゆく所よまたわ
長崎ゆく房々津あく
峰みゆくやうにかの、か岩
菖にまくれ、かくおちる
ひとの處の夏の夜に枯れて

千和用子和用子用

立ハシムニ草モカレバ
卫キムアリテナムヒノ御良ガレ
事ニシテモ学詔ヨ形モ花
綿革モ儀ニシテニモ貰キシ
シノクアリヨリモ長玉

用子木用

夏

きよくも着初ミシマラ給ウモ
板橋ノヨリアリシヤモ給
事ノルモ先ノリヨアイセシ
酒居ノ都ニ申モサハ初給
丸子朱打モ其ノ名也シタ
構あら連ニ近所、宿ノ前

凜長^ヲ

京^ヲ

芥舍

下^ヲ
タニ^ハ
豊^ヲ

峴^ヲ

鐘^ヲ

揚^ヲ

槐堂^ヲ

立節^ヲ

旅宿はほゞ、柳と朱唇の
次第がす。吹度やかよつた
る。おや。船うまての腰の先
もよに糸掛けあひ舟が
かくととを添せらんが
おびて崩れさへゆほん。
京 クルメ 雨 ミカハ 流 ハサミ 芦 シタマ 凌 シタマ 通 シタマ

二

苔れどもるみぬりきつま
るからくまむけとて穂まい
赤くも喜んでゆくや向ひ玉
拭きすりと作よ木の糸や
麦焼け戸れ牛ひる四月の
出でて来られまうねぎのふ
思すめだるやくし麦せ秋
又角にお仏さつづく花アホ

ふけや清きにぬひ

富 梅

日光

新一お鎖下てきさす

松 鳴

月

山道まよせの見色時鳥

鳳 朗

月

夜あらむ行かまやばれ

蒼 峨

月

爪立ニシカマヤ不^レき

有 来

月

青る人れどもや草一に火皆

月 有

月

置席^レ竹^レま石^レは^レ室

二

雨 角

月

蚊^レり来^レま^レて眼^レふ^レは

素 秋

月

故^レの事^レのす酒店^レの宿^レの

小 我

ま

別^レの事^レのす旅^レの宿^レの

ミガ

ま

故^レの事^レのす森^レの宿^レの

ミハ

ま

故^レの事^レのす旅^レの宿^レの

テハ

ま

故^レの事^レのす旅^レの宿^レの

居 居

ま

故^レの事^レのす旅^レの宿^{レ</}

体むすてぬつやうる 博の才

小蓑

一旅館宿すて二夜もゆく

曾見

翠に氣のつみ老若や秋の裏

丁知

物つきあひがむやもま盡

千々和戎

子この江水の戸口う耶

苔花

静のせむへ吐むるよしのれ

アツミ四郎

ひえへ春の山の四月や

秀外

弓にあすぬまでりゆくせむや
星音のよひを残して去れを 束
あはひかくとて忍えてねのれ
人のまづり来れむれぬ玉方多

スマ西月
仙危
アハ楚岳

アリ鳥津

夜せやゆゆも旅の水鶴
あるかくへ咲せやとうす園の百合
ひづくよ志くわぢや朝の桜

日向史牛

馬のすよ匂ひ鳴あら葉の子が

亭

うへ西アキの方角カミのはく水鏡ミツクニ
冬雪アキをうへもひは早苗アキ母
移アキの雨アキを日新アキかく榮アキる
厄アキ介アキよすぎ無アキえぞの百食アキを
宿アキは詠アキ夢アキの周アキに彰アキす 機アキや
はき章アキ大名アキおも因アキくノ那
壁アキもす二アキひ墨アキす臯アキ月アキや
まれあアキてゐる凌アキぬアキ 休アキ

蓬アキ雨アキ 蓬アキ雨アキ
宇弘アキ 宇弘アキ 宇弘アキ
菴アキ山アキ 菴アキ山アキ 菴アキ山アキ
仙アキ猿アキ 仙アキ猿アキ 仙アキ猿アキ
茶アキ山アキ 茶アキ山アキ 茶アキ山アキ

麦苅アキをなすてこれゆ。御アキふ
移アキのおりさんえアキとせアキとおアキと
神アキすとああつひや 夏冰アキ
すアキさや向アキより廻アキのる
蓮アキはる風アキをひみくひおアキわ
今朝アキくらまの新アキさすほはれ外アキ
あアキあやがさへて立アキやの峰アキ
すアキの峯アキ本アキ初アキみにくづれアキ
カツサ 菩薩アキ

初茄子つまむ指にかづれり

上毛

左谷

垣根を出て川アマツある清流や

アハ

嵐外

相のあそなき石原シナモロコの清流アマツ

トサ

左季

車カミまでいまつぬきやおどる

トサ

月夕

あらすよ唐カラスれんえくアラス良ヨウ火

イヨ

柴人

昼夜のれきアマツのせ井セイや

エキコ

ちのく

六月クモツや秋ヒナヅチてきする酒サケの味

エリ中

秀甫

一衣内ヒタチナをよけヒタチナヤタ涼ヒタチナみ

ヒタチナ

北

きだすとさうぬ裏ミナミのまちマチに
あくろアカルい門モルすあくぬ裏ミナミの去

カヒ 蓋白

圭布

笠叟

妹

青すれ色アキシロがえりの秋アキ士チ香
森アメニ古アヤシき木キ行ハシ人ヒトもや鳥トリの於アリ大オ仏ブ兄エ
魚アシの血クモリ砂サ掃ハラフして今イマ秋アキ千崖チヤウ
松マツもくわ又アタマあま秋アキ立ちよりアキ日光ヒカリ櫛スリ堂ドウ
山アメニあい風アゲハ森アメニ天アメニみ川ミクニ日光ヒカリ又アタマ
船ボウて眼メガネの景シテ水卑ミズヒものに世アツミ岐ヘ

六

ち夕アツシれ故シテよかよしんぞうれ
往アシカシて云アヒタシすよもあきアキ秋アキの宿スルやタク白ヒタチ知ル
あアく宿スルや云アヒタシすちよむ秋アキ止マツル日光ヒカリ止マツル
郭コロ都ツの門モンをく蒼アヲシかくひづ
羽アシカシ身シ一ヒナ物モノを拂ハラフて橋ハシ上アベ宗ムツ枕クニ眉ヒヤシ山サン水ミズ
はくつまかく拂ハラフて小コトハシのとトかくカクきよみ
吹アシカシけケ物モノ打ハシカシてタまタマかカの事モノ也タマ一ヒナ具モノ
朱サキ友チ

日向 双鳥
カツサ
皎雪 惠市
ハヨヒ
之由 市恵
サツサ
古溪 由
サツサ
呼牛 古溪
カツサ
樹村 呼牛
カツサ
秋の木乃下れほくあらうる
人里のなきを。春秋のふる木
木の木乃下れほくあらうる
月夜 月夜

裸身を立ひてあらまつたや

大坂

移居

日暮の舞つてよあわさう

トサ

達支

ハ新のきを重んじて本と簡朴
あわせゆけの事も無きて
すまうを放きかねてあくや松風
轆肩に是のあくやの露
芦の葉のあくや庭の露
野たつやひづてアシナガタマキ

六

庚午山外有隣
月之由秋田

うつくしきて名なき草や
花ねくわくいれるけ暮る
別れぬくにああるおきや
芊はるに斗アハクシムの
更サキや風のうれ日れ芊
久月や協の用ヤサニ三
地ハまやりぬますやほや
月新申に耶つくあせ毛

立松抱禾株
大賓木儀兩
卓郎吉木
小圃瓢儀

まねゆくすらあお教うる

ヒタチ
松

喰よみに生て世むるゆすま

ヲク
雁

猪泥れぬ薄糸や枝ゆま

サツマ
山

川こしてあい香をまく良が

骨

也す用きしてまれ、弓の麻が

馬年

彦うきて雨季ゆけり秋の雲

山

一束つたにすらぬれ、月

舟亭

灯や衣裏みかづき、移ひ口

真

一束つたにすらぬれ、月

奇嶂

一束つたにすらぬれ、月

山

掃除して腰す、これぞ散了柄

骨

糸が三んちよき落れて弱じと

大村

似ひ歌の多くて月も更に弱り

小

於す障こうひとすて弓に弓

方平

弓とくさむ、弓筋はるすま

上毛

引弓を引て波、弓を松毛水

キコニ

三のわせ深く、弓の筋外

神童

糸がく音をえず、弓生者

山住物

掃除して腰す、これぞ散了柄

馬雄

並みに来るや翁アノリ

山谷

おる葉の匂ひうらゝまりわ

兔芳

きく鶴や日なまひまでハ日せ

翠兄

さく葉やおんとすれハ人の極

坐文

出で歩てアハシキミを

祖文

くねもておはりう葉のを

董水

小す日石やまかへん松せぬ

千瑞

一寸ハメゆす何り后の月

羽扇

山雀に鳩引立子供系

兎川兄

多近すよもやけこの下りを

芦月

冬

あさり津らひ風之祐と附ひや
鳥やれ木だらもあすやかしれ
根よなくて隨分も草ヒタチ志くれど
志くすや小鳥ひよづれぬりを
乗せシテ轟轟めき附雲
がよびの心よすむれ小鳥アマハ

松 墨 什
聳 巢 碓 積
正 洒 入

ノ土

あいかみかアミテニモレシゆうも
附アレトアサア這アラシニシギル ヲク
駕イセぬよアトリヤ石音イセのを
けあわう冷ヒヤウ池ヒメ氷ヒメるま
一山乃木の聲ヒナギ吹ヒスる戸口ヒロや
小氣ヒコれあすり白ヒツたにかれヒツ
庵ヒツ掃ヒツて寂ヒツこなリ鴨ヒツみ奉
あすりまく前ヒツねに東ヒツのニ望ヒツす
玄ヒツ詔ヒツ

入であれ、いはまことかきくか廻む　玄子
入廻く枝う　ゑもく　海うも　弄化
待食と出て、廣庭や冬比月　松莊
賣亦にうき、もありふやの目　千鶴
さき園の敷やまい　川子　祖
蓮池もひづる水や　枯葉　宗羽
おやじにまのり　水心を　詠
ま今のりつてあらゆ火桶や　孤
下井　イタ
上井　イタ

柔代もや　陵冻　けく　益々く　夷則
雪嘗みて　さよのちう　きく　白桂
よきや　散波　こねは　アキ　^{アキ}黃山
本アリ　アサキ　ほんのり　アヤ　^{アヤ}養乳
いつまでも　アシのれて　石す　キム　卓也
谷深く　底う　朱のちう　す　^{アキ}五　渡
起ある根無や　雪もくちう　かう　幻芝

春のあはうからゆきある京
杜 魁
令郎へ都久会す。事
柿ひづ二令へ此ノ付る事
梯ハシへあはしす。此ノ事
塙ハシマへ人多しの方便も小也
裏ヒセシ 奥教里
裏ヒセシ 芳夏
弓イリ 拐山
弓イリ 午
山源カツサ 可
山源カツサ 亂也せまく雪の亭

辻あめひ役分 よや 雪ほや
二ノへり来て まゝ共つてぬ櫛分
徳すをふりしアラキヤ 氷水
天 石芝
池の鴨
吹き出でる
日暮
三日遊
ちつと出て
まく
訪人ある日を
着て小車
家あわせわくに
かづるふるふ
庵丁の毛髪うつるあああ
助 宣

柳すすみ柿只ひづる柏雪

太翁

一夸

ふるまゆ下戸も見えぬかるよ客

老つ

三宿丸

うい旅の旅船の旅氷アリ

タハ

湧湯

うい旅のふうれい船や櫓門
押ハ防ぐ戸口叩きノリ冬日月

ナコヤ

李曉

底すせす底すすすも夕暮レ

ヨツ中

豐馬

似合一おあせや着物の炭俵
也る藝あれいまわきて氷アリ

ヒヤニ

木司

有兩

四十四

姫ひづるせえの家み火爐下

サシ湖山

本所や所ノリ下戸氷

豊山

けうえり案内いや寺は僕

ヨリ

一肖

ふひるやかしめくとくも

ヒタチ

不轉

まこゑれ尼根りやあ是處

ヒタチ

諱玉

ふ眼まゆて下に居てゐる夜は

ヒタチ

路方

通道をあけてたゞ夜は麻鳴

大坂

逸聞

旅立キ今すきひん止まひ

大坂

眉岳

某官ついで候る屏風か
さく掃ハ皆う骨折る立ま
候様みも水かはや馬の部
あらじと被梅のつわむ塗
翌日よりあきまう年が書
何うも先通うよ一ひのれ
佳年
田原
大費
連志
而后

もつ氣こゝに立を思ひて
初夏アありを貰たまや未解
ちを三層でうれかうれし柱家
を署に子れ立物ふ袂角
云々自立てしてよかうや
春
采算
カヒ
桔翁
荷女
揭之
セ
菊江

あつむれす 枝喰林^{シタケ}三ヶ日 素紋
せつわ葉^{セツワハ}あまゆ^{アマユ}相^{シマツ}の^ノす^サ
船者^{ボウザ}年^ニ五^ゴ月^ツの奉^ス人^{ヒト} アハ 鴎^{アハ}里^リ
日^ヒつものあ葉^{アハ}ひ^ヒ花^{ハナ}の^ノう^ウ
わらくと氷^ヒみわれ^スる^スあ^ア
あやと^{アヤト}うんて入^スと^キハ橋^{ハシ} ヒ^ヒ 姪^{ヒメ}山^{サン}
万^{マニ}ヤ^ヤ敵^ヒを^イや^カる^ス女^ウ取^ル
あるもあふ人^{ヒト}す^スキ^ス 旬^ヒ光^{ヒカリ} 雨^ウ邱^ク
峠^{ヒコ}布^{ヒコ} 岩^{イハ} 布^{ヒコ} 如^ヒ測^ル

十六

士種^{ミカ}やだあ人も皆^{シテ}起^ス 水^{ミカ}
薪^{イガ}の^ノに^{シテ}勤^ムく^ス一^ヒ年^{イヒ} 松^{ミカ}
七^シ種^{シキ}や仏^{ブダ}は^シ向^カの^ノす^ス 翠^{ミカ} 兔^{ミカ} 明^{ミカ}
二^ニ里^リ也^シんが^シどんよ^シんゆ^シ城^{シテ}四^{シテ} 唐^{ミカ} 遊^{ミカ}
喰^{ミカ}は^シまや^シさん^シ詣^モも^シて^ス居^ス 唯^{ミカ} 草^{ミカ} 阿^{ミカ}
市^{シテ}も^シま^シ引^シぬ^シに^{シテ}お^シす^シと^シん^シ サツマ 其^{ミカ} 松^{ミカ}
量^シみ^シか^シ牽^シま^シく^シや^シ登^シ下^シ サツマ 其^{ミカ} 松^{ミカ}
あ^シま^シ一^シ夜^イあ^シや^シ松^{ミカ} 内^シ

大坂 佳峰

寅なむかあん首やう小松
ちゆひてあらゆゆる余寒
まゆ細も起くあるやをくと踏
一の寒きともつゝや 梅せむ
雀の子ねりあすくたれう
東荒えすす音三野四野外
松よわく氣有りく井にづく
梅うや一才月アク尋先 大坂
立 鶴翁 和風

カヒ

五老齋

ナセ

聖木柳や只人ふせうおよみ
枝間に余申重んじる柳うあ
水よよき心すれり柳の流れ
一重と二重い葉一重のあせじ
けゆきゆる朝やくらわと柳の花 セツ
寺里れ縁すアカは雪解や サヌキ
美すにわくや大ユハハサウ版 ラク
おぐく聖木柳あく成ほる 南岐

京

柳南岐

絲椎

梅の下をくずわ田の下細うる

京

六英

収入の後とすこしたるま復か

ア

露泉

柳もと首と枝も

四山子

長流

津音も柳もと枝も

三

蕉冰

いはゆのちれあれにかくと柳

二

蕉冰

人中をもまれて歩き柳

一

蕉冰

とありと歩き柳

蕉冰

蕉冰

と歩き柳の下に柳

蕉冰

蕉冰

人中をもまれて歩き柳

蕉冰

蕉冰

草の芽に押れて倒れ

蕉冰

蕉冰

まゆや柳見かたせ隅田川

蕉冰

蕉冰

あ柳にさわつてある小柳がや

蕉冰

蕉冰

常よに柳のまぶんはくと柳や

蕉冰

蕉冰

ひよどりの首筋にえろうす

蕉冰

蕉冰

待雨や降くや風ふ風情あ

蕉冰

蕉冰

薬石すと日ひくとゆの柳や

蕉冰

蕉冰

手に筆とれ又之うもみす
うめふと魚のつく二月や セツ
さぬよ。え木の接木や セツ
身を返す内巣の底シナ 京
ほんておうちもまかひ サカ
及口見て事シタ、煮シテ歎ヒヒ
あがれはつてみる細スジ糸 サキ
あそびサシタの底シナ 夜照
仙骨 仙骨

十九

匂水す片里ハタケに足す
あるやもくハタケ虫の壳
見えある風ハタケすありき
山吹ハタケみちの小鶴や大根干葉
あげき、ゆかてひまむ日ハタケ年
あんてよかくアスカの小田代ハタケ
まだりやな多代見ゆる花の盡ハタケ
巴山 素行

湯元水ゆゑもくまとて消アモ
二月ツキすもすむる日ヒすあり梅シダレの木
中ナカニに及シテくまれてまわ水
さシテすら扇シヤンをすや春ハるん チホ
名メイをアシスはみほミホつまゆムシマ
候マタタク業ウラハにす分ブかそれシテれや
結ハシの背シヤウついて物炎モノガタリ危ハザ ヒセシ
もモれぬヌきシテ小事コトハ後アフタ赤アカ
杉居ヒノキ在閑イセ羽人ヒト

三

慈シテがまシテ善干シテ前シテ多シテ
芦シロの葉シロすりづく魚シロ先シテ而シテ ヨシ
大根シロや男シロいシテよしやまシテ一芝シテ
あひもや一称シテかシテ一休シテ テハ
桔シロ葉シロはみ人シテおりぬ茶シテ一洒シテ ワカサ
長舌シロや一稱シテのシテより裏シテ アフミ
おシテまシテおシテ川シテ初シテ カタ
松シテに植シテえてある様シテ如シテ耶シテ

大坂林曹ヒサカ・リム・ソウ
聞二

ひじわまく拿立がける様多々 キリハ 鴻
たての上えうり掃くをくふ イヨ 育居
社内才さう一木あ／＼ 木 大之
一本の木を竹筒うつて花のんや アハ が、坡
芝の木を竹筒うつて花のんや ヒセニ 井龍

井み吉 塚の中／＼せえり繁

舍用

ノ主

追加

花すもくつねと三カ月の箒か
アラモテヤトに思ふや鐘かむし 檻 雄
炉きいに近眼よつきせんくみ 日向 習
本の木の鼻うつうす牡丹を サツマ 康門
まの袖が伸びてくすやつの地 ラク 智
水をまくまくこぼる垣根ア 京 芳英
竹雨賀アキセキをもつア萬
栗居

田を極て度るやるに起あを
うるる田ひ今原くすらす
想ひ得るまづく蚊帳ふ
言ひうやくかきく扇ふ
ちれまへはほせよお葉す
沙さ方に火をたく船舟下アハ
在雨下アハ 月向 五木アハ 雪和 嘴浪アハ

蕉の泊中並拂ふ風如の
ももとぞそれち雷鳥と浦川
千葉うちの一人考士
嘗志ふ也ふと後乃
人アハ 一集アハ
正アハ 大東同アハ



